終焉の息吹

ナギシュウタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終焉の息吹

【Nコード】

N2058L

【作者名】

ナギシュウタ

【あらすじ】

時を越えるボクと、終焉を迎えるセカイの話。

果たしてどれだけのミンナに伝えるコトができるだろうか。もう、全てが終わったアトにこのハナシを見てるヒトもいるかもしれない。今、このハナシを見てるキミへ。
僕のハナシを最後まで聞いてくれる？
終焉の息吹を感じる、このハナシを。

ボクはトクベツな存在らしい。
トクベツ、といってもミンナがそう言ってるだけで、ボクからしてみるとごくフツウなだけだ。
ボクは時を超えることができる。

うーん。

何回言ってもやっぱりオオゲサに聞こえてしまうなあ。まあ、他に良い言い回しなんて、ボクには思いつかないケド。
とにかく、僕はどの世界でも、そう 時を超えることができる
と 思われてるみたいだ（というかそのとおり）。

今のボクには大ざっぱに時を超えるコトしかできない。“今の”
ってわざわざいったのは、とある世界で大きくなった僕のハナシをしてくれたトモダチがいたから。

僕ら（時々驚かれるけど僕みたいな存在は僕以外にもいる）は過去とか未来とかを飛び回ってるから、それが大きくなったボクなのか、生まれ変わる前のボクなのか（ボクが生まれ変わる存在だったコトも、そのトモダチから聞いた）、はたまた他のそっくりさんか

どうかは分からない。

きつと、どんなに大きくなっても。

ボクはいつか、どこかで大きくなったボクか、今のボクより小さいボクにバツタリ逢うコトになるかもしれない。

あ、違った違った。

今までボクはボクに逢ったコトが無いんだから、とりあえずボクは今のボクより小さいボクに逢うコトは無いんだろうな。

……………ややこしいなあ。

時間っていうモノはとてもやつかいだ。

時を越えるっていうコトは別の世界へ行けるっていうのと同じ意味なワケで。

えっと、例えばボクがダレか（仮にAさんとしたら）を別の世界に連れてってしまったら、Aさんのもともといた世界がAさんのいなくなった世界と、本当ならばあるハズの“いなくならなかった世界”、二つの世界ができてしまう。たとえばそんなに大きなコトでなくても、ダレかがケガをする、しないとか、そういった小さな運命のズレがいつつどこかで絶えず起きているから、世界っていうのはムゲンにあるって考えていいんだ。

……………ごめん。分かりづらいよね。

自分で言っても、よく混乱しちゃうもん。

……………で。

ボクは今、この世界にいる。

今まで色んな、色んな世界を見てきたけど、今回が初めてだった。今まさに、終わりを迎えようとしているこの世界に着いたのは。

こんな素晴らしい世界が、終焉の時を告げている。

たまに理想的とも言える世界とか、すさんだ世界とかもあるけど、ほとんどの世界じゃだいたい良くもなく悪くもない（と言ったらその世界のヒトたちにシツレイかもしれないけど）、そんな世界ばかりだ。

けど、この世界は違った。

オオゲサに全てがカンペキ、っていうコトじゃなくて、……何て言えばいいのかな、フツウというか、ダメも不幸そうな顔をしているヒトのいない……。ココはそういう世界だった。

それはボクも例外じゃなかった。

時々ボクを過度にトクベツ扱いしたり、逆に拒絶したりする世界とかもあるけど、ココの世界はボクをそんな腫れ物を扱うような扱いをするワケでもなく、かといって恐れられたり避けられたり、なんてコトも無く、ごくフツウにボクは日々を過ごすコトができた。

ごくフツウに。

一番、シアワセなコトなのかもしれない。

ごくフツウって言ったら、毎日が平凡なイメージかもしれないけど、実際のトコロちょっと違うワケで。

……何て言えばいいのかな。こう、なんというか、毎日を安心して過ごせるというか、なんというか……。

表現しづらいなあ……。

けど、きっとそれが“ごくフツウ”ってコトなのかもしれない。

けれど、そんな“ごくフツウ”なハズのこの世界が、終わりを迎

えようとしている。その点ではこの世界は“ごくフツウ”なものとはいえなかった。

僕は広場にいた。

中央に噴水があるだけのシンプルな、けれどとてもきれいな広場。つい最近までは色んなヒトの色んな笑顔が咲いていたこの広場。

だけど、今はボクだけ。ダレもない。

影もない。声もない。風も、命も、時さえも、全部、無くなってしまったかのようで……。

ボクは噴水の脇に腰を下ろして、澄んだソラを眺めた。

そして顔を上げて澄んだ水を眺め、淡く映った自分の顔を眺めた。

ダレもいなくなったのはこの町からいなくなったからじゃない、と思う。きつと“この世界からいなくなった”んだと思う。

と言っても、ボクがやったワケじゃない。ボクはそんなチカラなんかまだ持っていない、ただの非力なヤツだ。

直接見たワケでもないからキツパリとはいえないし、言い切れないんだけど、この状況で町からヒトだけがこつぜんと消えたってコトは、きつとそういうコトなんだろうと思う。

非現実的なハナシだけ。

ボクが存在だって非現実的なんだろうケド。

波さえ立たない水面を眺めながら、ボクは町のミンナのコトを思い返した。

悲しい思い出なんて、ひとつもなかった。

ひとつもないんだ。

あるのは、思い出すだけでエガオになってしまふような、そんな楽しい思い出。ボクの言葉はきつとミンナには伝わらなかっただろうケド、ミンナは本当にあつたかく、ボクに接してくれた。

心から、ありがとうと言いたい。
せめてどこかで、もう一度、逢いたいな……。

あっ、と声がした。

もうダレもいないと思っていたボクは驚いて飛び上がりそうになった。

水面から目線を外して後ろを振り向くと、一人のヒトがいた。

そうだ。そのヒトは。

ボクがこの世界で初めて出会ったヒト。

そして、この世界を“創った”と言ってもおかしくないヒト。

大統領とか、そんな地位が高いとかじゃなくてただ、この世界を

“創った”ヒト。

そうとしか、言いようがないんだ。

そのヒトもこの世界にまだ自分以外の誰かがいたコトにびっくりしてるみたいだった。

けど、そのヒトはボクに笑みを作って（決して作り笑顔ではない）ボクの方にゆっくり近づいてきた。

オンガクキゴウのアンダンテみたいにゆっくりと（この言葉もムカシ教えてもらった。オトにキゴウだなんて、ちょっぴり想像しづらいケド）。

気がついたら、ボクは噴水の縁に座るそのヒトのひざの上に乗っかっていた。そのヒトは両手を噴水の縁につけて、ソラを仰ぎ見ていた。

ボクももう一度、ソラを見上げた。いつもと変わらない、晴れという言葉がピタリくるような青空。

もうすぐ、この世界が終わってしまうなんてウソみたいだ……。

もうすぐだ、とそのヒトは言った。

もうすぐ世界が終わる、と。

ボクはそのヒトの力才を見た。なんともいいにくい力才をしていた。やりきれない力才を。

そして、とてもさみしそうな力才を……。

この世界がどういう風に終わりを迎えるか、ボクは知らない。ボクはまだ小さいし、それに預言者なんかでもないし。

けど、そのヒトは全部を知り、悟ったような力才を、しているようにも見えた。

そろそろ行かないの、とそのヒトはボクに優しく語りかけてきた。

もうそんなに時間は残っちゃいないんだ。君は君の世界に早く戻るべきだよ。

ボクはうつむいた。

そのヒトが言ってるってコトはこの世界にあまり時間が残されていないのは本当なんだろうけど、ボクはこの世界がとても好きだったし。

それに、ボクには戻る世界なんてないし。

そう。

戻る世界は無い。

もしあったとしても、今のボクにはボクの行きたい世界に正確に行くチカラは、無い。

ボクの力才を見て何を言いたいのかが分かったのか、そのヒトはちよっとバツの悪そうな顔をした。

僕の頭をなでながら言った。

ごめんな。

謝らなくていいのに！ ボクはもしも喋れるのなら大きな声で叫びたかった。

だってボクは、時空の狭間を彷徨う、自分の帰る家すら持たないモノ……！

ただ勝手にボクがこの世界にやってきただけだっていうのに……！
でも。

そのヒトはそんなボクの為に涙を流してくれた。

だから、ボクはこの世界が好きだった。

できることなら、この世界を救いたい。

できることなら、このヒトを別の世界に飛ばしてでも、救いたい。だって。

ボクはこの世界に何もお返しができないままココを去るなんて、そんなコト……、ボクには耐えられないモノがあったから。

ケド、今のボクには何もできなかった。

こういう時に、いつつも思うんだ。

どんなに時を越えることができて、こんなに何もできないなら、時を越える意味が無いじゃないかと。

フツウに暮らしているミンナに、ただメイワクをかけてるダケじゃないかと。

ミンナからするとそこまで思わなくてもって、もしかしたら思ってるのかもしれないケド。

それは僕も分かってるケド。

それでも、それじゃあ、ボクは何の為にこんなチカラを手に入れたんだって、そういうハナシになる、とボクは思ってる。

けれど。

今のボクには時を越えるしかなかった。

ただ、生き残る為だけに。

なんだかボクの方がやりきれないキモチになってきた。

ボクは残りたいキモチを抑えて、時を越えるための準備（オオゲサに言うけど、実際何もするコトは無い）を始めた。セナカのちっちゃなツバサを羽ばたかせる。

ねえ、と後ろからそのヒトの声が聞こえた。ボクは振り返った。最後に聞きたいんだけど、君の名前を教えてくださいかい？

ボクはまたうつむくハメになった。だってボクには名前がまだ無かったから。今まで巡ってきた世界じゃ全て、ヒトたちに勝手に付けられた名称（別に悪い名称じゃないんだよ）で呼ばれてたし……。

ボクは首を振った。

そして、今度こそ時を越える準備を始めた。別に、トクベツな儀式やらをするワケじゃない。ただ、時を越えるだけだ。

そっか……。もう行くんだね。遠くへ、想像もつかないくらい、遠くへ……。そのヒトの言葉を聞いて、ボクはソラの方を向きながらうなずいた。

ボクは飛んだ。

まもなく、ボクのカラダが光に包まれていくだろう。そしてまた、新たな世界に降り立つコトになる。

そう思っているうちに、ボクのカラダはまばゆい光に包まれてきた。ボクは最後にそのヒトに、この世界を創りそしてこの世界と運命を共にするそのヒトに、カオスを向けた。ありがとう、とボクはココロの中でつぶやいた。

するとそのヒトは微笑みながらこう言った。

最後にも願いしてもいいかな？

ボクは首をかしげた。

君の名前を考えたんだ。“ファア”。遠くへ、って意味なんだ。

……ファア、どこか遠くで、良い世界を見つけられますように。

ファア。遠くに、……………。

ありがとう、本当に。ボクはキミのコトを絶対、忘れない。ボクは最後にそのヒトの方を向いてニコツとうなずいてみせた。

そして、光の中に消えた。

ボクはファア。時を越えるモノ。いつかどこかで、このハナシを聞いてくれたキミに、逢えますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2058/>

終焉の息吹

2011年1月19日05時46分発行